

「桃園文庫」と東海大学附属図書館

蟹江秀明

東京豊島にある故池田亀鑑博士邸の桃園文庫を、東海大学附属図書館原田敏明館長にお伴をして初めて訪ねたのは、昭和44年11月15日のことであった。原田先生（58年1月没）は妹君（37年4月没）が池田博士の夫人であった関係で、博士夫妻亡き後の池田家の遺族より文庫の保存移譲方を一任されていたのだった。当日、生前に利用されていたままの状態で保管された書庫へ案内して下さったのは、次男研二氏と、博士没後も整理を続けながら文庫を守ってこられた木田園子女史であった。住居に付随して建つコンクリート二階建の書庫には、和装、洋装本が整然と並び、特に和装本については、書架順に整理番号が付けられており、これは博士が自ら作製された手書き目録と一致するものであった。この手書き目録はコクヨのルーズリーフ46枚に横書きで「い」から「め」に分類され、それぞれ書名、冊数と購入時の整理番号がアラビア数字で記入しており、最後に覚え書き等を記す備考欄を設けたものであった。書名の頭に「貴」の文字が付いているものも多いが、これは「学問的価値と物質的価値の両面と推定する」と表紙に注記されているものを指し、後の目録作成上にも大いに参考となった。

翌昭和45年は新学期と同時に、東海大学にも学園紛争の嵐が吹き荒れた年であった。ロックアウトに入った夏、松前総長（松前重義博士）と各学科の専任教員との意見交換の会が持たれることになった。この席で、かねて原田先生より相談を受けておられた日本文学科石井庄司主任教授から、桃園文庫購入についての希望が公式に出された。国文学にも造詣の深い総長は、この申し出を即座に快諾されたのだった。

昭和47年、東海大学建学三十周年事業の一環として桃園文庫を購入することが正式に決った。当時の記録をたどると、同年9月18日から3日間、藤井茂利整理課長（現鹿兒島大学教授）の陣頭指揮の下、総勢23名の館員が池田邸を訪れ、博士の配架意向を損なわないよ

う配慮しつつ、書名目録の為の原稿作成を行った。その後、約一週間を要し手書きの「桃園文庫書名総目録」が完成、これを携えて、原田先生、池田研二氏と共に、斯界に信頼の篤い古書店に最終的照合を依頼に行ったのが10月19日であった。

池田家と東海大学の間では譲渡についての正式の契約が交された後、御遺族への形見ともなるべき博士の著書類数十点を残し、他は一括して大学の附属図書館に搬入することになり48年11月、三日がかりの作業でその全部を移動し終えたのだった。折から、医学部開設を始め、大学院の新設等、大学が拡充期に入り、図書館業務も繁忙を極めた時期であり、桃園文庫の整理に必ずしも全力を注げる状態ではなかったし、館員も古文書の整理の知識を持合せている者は少なかった。しかし、館員は国立国会図書館、宮内庁書陵部、国文学研究資料館、国立公文書館等を視察し、和装本整理の勉強に励む一方、文庫全体の燻蒸処理も進めていった。

昭和51年5月に「桃園文庫整理準備委員会」が発足して整理が進められ、昭和58年4月には今日の目録完成の母体となる「桃園文庫整理委員会」が鈴木八司館長の指示によって発足した。委員長には金子金治郎元東海大学教授をお迎えし、幹事を私が勤め、事務幹事に村山重治整理課係長（現図書課長）を、その他、図書館整理課の女性館員が作業に当ることになった。金子先生は「連歌考叢」の執筆や「連歌貴重文献集成」の編集等の多忙の最中にも係らず、毎週必ず書庫に入られ、目録の配列から編成、解説等の細部に至るまで目を通されると共に担当館員の指導にも当って下さった。この御尽力なくしては今日の目録は到底完成し得なかったであろう。

かくして昭和61年3月に物語文学を中心として『桃園文庫目録 上巻』を、昭和63年3月に物語文学以外について『桃園文庫目録 中巻』を刊行し、世に公開することができたのである。

（『桃園文庫目録上巻』による、理事・文学部教授）

